

## 第 82 回 戦後最長の景気拡大とアベノミクス幻想：戦後体制の転換を迎えて

2019 年新年を迎えて、景気拡大が戦後最長を更新したことが確実らしい。政府の「景気動向指数」によるものだが、ただし景気動向指数の最終的確定は大幅に遅れる慣例だし、今回は今年度の政府予算案が「毎月勤労統計」の調査の不正事件で閣議決定のやり直しとなった。今後の政府統計調査の全面チェックが不可欠だろうから、その結果の影響は大きいだろう。作業の遅れだけでなく、景気動向の判断そのものにも影響するだろう。その点では、戦後最長の景気拡大も、大きく変わるかも知れない。中国の統計の悪口など言えないほどの日本の統計数字のお粗末さが、今回暴露された点をまず注意したい。

とすることで、条件付きの景気判断に過ぎないが、「いざなぎ景気」が 2002 年 2 月から 08 年 2 月まで 6 年 1 か月、今回の景気拡大が 2012 年 12 月からだから、本年 1 月で「いざなぎ越え」となったわけだ。早々と総理は「この 6 年間、経済は 10%以上成長した。アベノミクスは今なお進化を続けている」と施政方針演説で誇示して見せた。お粗末極まりない統計調査の不正事件を別にしても、「いざなぎ越え」の景気拡大を自慢できる話なのか？最近の景気動向の特徴について、検討してみたい。

資本主義経済である以上、景気の循環的変動は不可避であろうが、その変動の形は歴史的に変化してきた。また循環的変動の期間も「いざなぎ景気」の 4 年 9 か月、上記「いざなぎ景気」が 6 年 1 か月など、色々変わってきた。特に、経済成長との関連が重要であり、資本主義経済は、景気循環を通しながら経済成長を実現してきた。「いざなぎ景気」の 1960 年代は、年率 11%を超える超高度成長が実現した。80 年代は 5%台、90 年代から 21 世紀を迎えて、2%台から 1%台、「いざなぎ景気」が 1.6%、「いざなぎ越え」は 1.2%の低成長だ。ほとんど成長できぬまま、ダラダラと実感なき景気回復が続いている。とても「アベノミクスは今なお進化を続けている」と胸を張れる状態ではない。資本主義経済は、もはや景気循環を通して経済成長を実現できる時代が終わったのだ。そこにまた、資本主義の歴史的限界を見なければならぬ。

つぎに、今回の景気拡大は、前回の「いざなぎ景気」が 08 年 9 月 15 日のリーマン・ショックで終わり、その後の景気回復から始まっている。リーマン・ショックによる米国発・世界金融恐慌は、戦前の 1929 年の世界大恐慌以来と言われ、これによりソ連崩壊後の米による世界一極支配も終わった。その後の景気回復での中国の急速な台頭、中東支配における米国の相次ぐ失敗など、パックス・アメリカナは終わりを告げた。その意味では、リーマン・ショックの世界金融恐慌が、世界史の転換の契機だったとも言えるだろう。初期マルクス・エンゲルスの唯物史観の「恐慌・革命テーゼ」のドグマ復権かも知れない。だが、アメリカ資本主義そのものが崩壊したわけではない。超低金利による基軸通貨ドルのバラ撒きにより、中国の台頭と共に「いざなぎ越え」の景気拡大が進んだのだ。その点で「恐慌・革命テーゼ」のドグマは蘇らなかつた。逆に世界景気の長期拡大を準備した。

ここで世界恐慌の歴史を振り返る余裕はないが、ほぼ 10 年ごとの 19 世紀の周期的恐慌も、政治的危機に結びついたことはあるが、「恐慌・革命テーゼ」を実証したことは一度も無かった。金融恐慌は、資本の「絶対的過剰」で低下した利潤率に、利子率の急上昇が重なり、金融パニックが発現する。この恐慌を通して不良債務や赤字企業を整理し、続く技術革新による景気の上昇、そして高度な経済成長を準備する。19 世紀イギリスを中心とした資本主義の発展は、激しい金融恐慌を発条に成長していたし、それを学んだ後期マルクスの『資本論』も生まれたのだ(拙著『恐慌論の形成:ニューエコノミーと景気循環の衰減』日本評論社刊を参照のこと)。それと比較すれば、「いざなぎ越え」の今回の景気回復などは、超低金利の過剰流動性によるドルのバラ撒きの金融緩和をすすめ、膨大な国の借金財政、不徹底な技術革新で労働力不足が深刻化し、それに便乗した「アベノミクス」による資産格差の拡大など、本格的な景気回復とは程遠い低成長のダラダラ景気の「いざなぎ越え」の現実を招いただけだ。日本をはじめ、すでに資本主義経済は、世界金融恐慌を発条とした成長を実現できぬ点こそが歴史的限界なのだ。そうした歴史的限界の打開を抜きに、景気の長期化を自賛しても全く意味はない。

こうした日本をはじめ欧米先進国の停滞・低成長の景気拡大に比べて、リーマン・ショック以後の世界経済の中で、中国を先頭とする旧第三世界の発展成長が目覚ましい。戦後体制の東西二つ世界の対立が、先ずソ連崩壊で東の世界が潰れ、次に単独一極支配の米の低落による西側世界の行き詰まりの現実が続く。そうした行き詰まりの現実の中では、「アベノミクス」の成功など、誰も相手にしないだろう。すでに戦後世界は、東西対立からパックス・アメリカナが終わり、パックス・アジアナに移行しているとの見方も有力になってきている。米・中対立の激化する中で、日経新聞ですら「世界の半分に膨張する」(「アジアを超える」1 月 28 日付)を特集している。米・中対立も、パックス・アメリカナからパックス・アジアナへの世界史的転換の中で見なければならないだろう。

東西二つの世界対立の旧戦後体制の中で、朝鮮戦争との関連もあり、片面講和から安保体制によって日本資本主義は西側世界に、そして日米同盟の絆で固く結ばれてきた。米・中対立が激化する中で、日米関係の重視は止むを得ないにしても、世界経済の現実によるパックス・アジアナへの新たな戦後体制の転換を無視することはできない。中国の台頭について、古い中華思想による覇権主義には十分な警戒が必要だとしても、アジアの一員として、とくに日本の東北地方は、東南アジアから区別される「北東アジア」の地政学的地位からしても、環太平洋ではない「ユーラシア」列島として、自らの地政学的位置づけを明確にしておくべきであろう。仙台・羅須地人協会としても、東北大学への中国の文豪・魯迅の留学をはじめ日中関係は特に緊密である。また、宮沢賢治は、代表作『銀河鉄道の夜』など、「西域幻想」と言われているシルクロードに関わる沢山の童話集がある。賢治は、「ユーラシア列島」の東北・岩手の自然と文化をユーラシア文明として位置付けるとともに、それをさらに賢治の理想郷である「イーハトヴォ」の夢を描こうとしたのではなかろうか。賢治の歴史的慧眼を十分に評価しなければならない。